

「何するんだ！ 痛いじゃないか！」  
「何を構えていた店主は、慌てて俺を助け起す。」  
「ふんやむむ」

景を掲げ入り置かれぬ、いら尊をりて宗洋。さうして用ひの無い  
かのもうして先程の機。ない間がぐきき引に聞やすの機ない  
てい種を先店の街店。つてい種を先店にスナタの売に。特  
て。取付け金を掛け懸てこに送紙懸懸とい日、い私に。主  
店の喜袋物を懸小。た。こ様をトウケテ所のズベー、い種  
「なからうらももさうこの魚。い種懸とさうトナトナ」

[illegible]

【コネコで】猫と人間が外見的に、猫から愛成

買ったばかりの揚げ物の無事に安堵しながら、俺は店主を睨んだ。店主は頭を掻いている。

「すみません。でも、こいつが勝手に店の中へ入り込んでたんですよ」

俺は店主の指さす先に目をやった。転がっていた丸いものは素早く立ち上がり、脱兎のごとく逃げていく。

「……子供？」

「あれ？ お客さん。ご存じありませんか？ あれはコネコビトですよ」

小さな後姿は、夕暮れの道を見る間に遠ざかっていた。

悪いと思ったのだろう。店主は、ビールを半ダース買った俺にワインを一本進呈してくれた。投げ売りのワインだが、料理酒には充分である。ありがたく貰い受け、家路を急いだ。

「それ美味しい？」

住宅街に差しかかり、街灯が点つているだけの道である。急に声をかけられ、俺は飛び上がりそうになった。

振り向いた俺の目は、不可思議な造形を捉えている。一番近いものは、二足歩行に擬人化した動物のぬいぐるみ

ネコだって王様を見ることができる

[illegible]

— + 10 ^ 4 2 7 8

「……食べる？」

尋ねる俺に頷いていた。

俺の家は一軒家である。

祖父が土地を取得した当時、この辺りは野原の広がる僻地だった。そこへ父が家を建てる。定年を機に両親は郊外へ移り、勤務先の利便で俺だけが、この家に残された。

ネコだって王様を見ることができる

『コネコピト』というのは、ここ数年の間に現れた新種の生物であるらしい。

「お茶も飲めし。喉に詰まるだらう。あと野菜」

皿に惣菜を取り分けてやり、俺は携帯端末の情報を追った。自然保護団体の広報には、人間の子供と同様の食事で容で可と記載されている。箸が使えなかったためパンを焼き、サラダと惣菜を皿へ盛って出した。

「そうすると、つまりこういう事か？　昨夜は普通の猫だった？」

コネコの話は、こうである。

ネコだつて王様を見ることができる

[illegible][illegible][illegible][illegible]

自然保護団体の質疑応答事例によれば、コネコビトは人間になることを望んだ猫が変成するものらしい。

「……願ひ事……したかな？」

満腹になり、眠気のをさしていたコネコは、自分の発言を正確に覚えていなかった。

「お爺ちゃんとうつと一緒にいたいって頼んだけど、『旅がサダメ』だから駄目だって」

コネコの話は不明点が多い。だが、一番の問題は、保護者が必要な立場にも拘らず、単独で生活している事実だ。

「……考えたんだが、この団体に行つてみたらどうだ？」

食ばさせてくれるらしいぞ」

自然保護団体のホームページが表示された画面をコネコに見せる。

「ごはん！　ここ、どこ？　遠いの？」

「神奈川。……江の島のほうだな。ここからだと言車乗る」

「コネコは頭を振った」

「駄目。お命ちゃんが戻って来たら、一緒に行くから」

「年寄り猫と春に再会する約束だと言。コネコの決心が変わらなければ、同行を許可してくれるのだそうだ」

「春まで半年は先だぞ。本当に迎えにくるんだろうな？」  
俺は空の皿を片しつゝ、ため息を吐く。台所の窓から覗く庭の一角でネコジャラシが風に揺れていた。おしま、

作者 ドーナツ

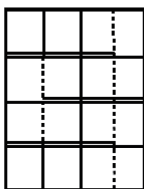
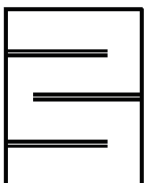
twitter :  
[https://twitter.com/donut\\_no\\_ana](https://twitter.com/donut_no_ana)

サイト : ドーナツの穴  
<http://donutno.github.io/>

(c) 2014 ドーナツ

ネコだって王様を見ることができる

※王様の絵が上になります



山折り ..... 谷折り

(c) 2014 楠樹 暖

ネコだって王様を見ることができる